

121

松本市10年間の動態統計及び死因統計

寺嶋 正一 久保田 勝

(松本市立病院内科)

松本市は人口 74,000. 長野縣の中央海拔 600m. 大陸的氣候で夏暑冬寒. 降水量少く快晴多く乾燥地. 人口は大正の中頃より昭和の初め頃までは著しく増加したが, 近時やや沈褪の傾向である. 統計は昭和 2 年から昭和 11 年に至る 10 年間の材料によつた.

(I) 人口構成

體性及び年齢別人口構成を國勢調査の結果から觀察して見ると, 大正 14 年及び昭和 5 年はともに殆ど同一で, 大體ピラミツド型をなすが男性では 15 才乃至 19 才のものが最も多く, かつ甚しく過剰である(約 3 割). ついで 20 才乃至 24 才で, これまた著しく過剰である. 女性でも大體同様であるが, 20 才乃至 24 才は男性ほど多くない. これは全國の都市平均と同一の様態を示す. この過剰人口は市外から轉入のためと思はる. 製糸工女だけでも昭和 5 年度に 5,900 名あつて, その中 3,700 名は市外及び縣外のものである. これ等のものは重病の場合は本籍地等に轉出し, 従つて本市の青年死亡率を低下させる一因となる. 昭和 10 年度はこれ等の青年層の過剰人口は甚しく減少し, 本市の人口構成が漸次變化しつつあることを示してゐる. 本市の入寄留者は年度によつて動搖が多いが, 大體増減なく出寄留者は年とともに増加の傾向である.

(II) 一般出生率・一般產生率・配偶產生率

10 年間の一般出生率は増減なく人口 1,000 につき 27 前後で, 全國都市平均と大體同率である. 昭和 10 年度では全國 50,000 以上 100,000 以下の都市 46 中, 第 43 位で甚だ低位. 本縣下の各郡市中最低位である.

つぎに一般產生率 (15 才乃至 50 才の女 1,000 に對する出生率) は

[醫學と生物學・第 1 卷・第 9 號・頁 416-420・昭和 17 年 5 月 5 日]

つぎの如く本市に於て低率.

	大正 14 年	昭和 5 年	昭和 10 年
全 國	180	135	144
長野縣	183	150	163
松本市	100	88	101

また配偶産生率（有配偶の生殖可能年齢の女 1,000 に對する出生率）は、つぎの如し.

	大正 14 年	昭和 5 年	昭和 10 年
全 國	218	208	214
長野縣	222	298	243
松本市	184	184	185

即ち本市は相當低率ではあるが、これは全國都市共通の現象であらう。

（Ⅲ）月別出生及び出生男女の比率

昭和 10 年度の本市の出生を月別 77 例を以て觀察するに、1-3 月多く 6, 7 月に少い。この關係は全國全國都市、長野縣と同一である。

出生男女の比率は全國では出生女 100 に對し、男は 105 前後を示すが、本市では男が 100 以下の年が多い。

（Ⅳ）死産率

本市の死産は人口 100 に就き 1.5 前後で、年度により増減なく、全國、全國都市、長野縣及び縣下各郡市等に比し低率である。然しながら出産 100 に對する死産率は、これに反しやや高率を示す（平均 6）。また死産女 100 に對する男の比率は本市は全國、及び全國都市、長野縣等に比し高率を示す。

（Ⅴ）婚姻率・離婚率

婚姻率は 10 年間に増減なく、一般に低率である。昭和 10 年度に於ては人口 1,000 に就き僅かに 5.34 で全國の 8、全國都市の 6.6、長野縣の 8.2 に比べ低率である。また縣下の各郡市中最低位を示す。また全國 50,000 以上 100,000 以下の都市 46 中第 44 位。

離婚率は 10 年間に増減なく、昭和 10 年度は 0.4 で低率、前記 46 都市中第 43 位である。本縣下各郡市中でも最低位。また婚姻 1,000 に對する比率は 74 で、これは前記都市中第 42 位でやはり低位にある。

(VI) 一般死亡率・乳兒死亡率

一般死亡率は 10 年間大體人口 1,000 に就き 13 前後で全國、長野縣に比べ低率である。また縣下各郡市中甚だ低位にある。前記 46 都市中 35 位。また 10 年間に於て増減なく全國に於て漸減の傾向あると異なる。

乳兒死亡率は 10 年間を通じ増減なく、常に全國・全國都市及び郡部より低率であるが、長野縣よりはやや高率である。

(VII) 人口の自然増加

昭和 10 年度に於ては 8.02 で、全國の 14.8、全國都市の 12.8、本縣の 15 に比べ著しく低率。本縣各郡市中でも上田市とともに最低位である。

(VIII) 體性別年齢階級別死亡率

上記 10 年間の本市の總死亡 9431 名に就ての統計である。まづ**男性**では 40 才までは凡て全國よりも低率である。40 才以上は全國と大體同率であるが、60 才以上となると高率となる。特に 4 才以下の乳幼兒死亡率は極めて低く、また 15 才 - 25 才に於てもまた極めて低率で、全國の半分である。ところでこの年齢階級は上述の如く過剰人口が約 3 割もあるが、それを差引しても、なほ低率である。**女性**も大體男性と同様であるが、5 才 - 14 才の間では死亡率は全國と比べ餘り低くない。また高年では男性と異り全國と同率。**男女を比較すれば** 4 才以下は男の方が高率、5 才 - 24 才は女性の方が高率、25 才以上では女の方が僅かに高率、45 才以上では女は男より常に低率で高年となるほど、その差が著しくなる。

(IX) 大分類による原因別死亡

本市に最も多いのは神経系疾患で、ついで傳染病・消化器病である。この順位は全國及び一般都市と異なる。これは本市に腦溢血多く結核少きによる。全國及び都市平均に比べ高率のものは癌・神経系病・血行器病・消化器・泌尿器・皮膚病及び不明の診斷である。また低率のものは酒精中毒・骨及び運動器疾患・レウマチス・傳染病・乳兒疾患・血液病である。

(X) 中分類による原因別死亡

急性傳染病中最も多いのは百日咳・デフテリア・腸チフスの順序。百日咳と赤痢はその流行が全國と平行する。猩紅熱と百日咳は女が多いが、その他は男に多い。全國平均と比べ多いのは百日咳とデフテリアで約 2

倍、少いのは赤痢及び疫痢並びに麻疹である。結核は女の方が多し。呼吸器結核は全国の半分でその他の結核は全国と同率、癌は女に多く全国と同率。脚氣は男に多く、極めて低率。腦溢血は甚だ多い。結核を凌駕する。慢性心内膜炎及び心臓辨膜症は高率で都市平均の2倍。肺炎はやや低率。下痢及び腸炎はやや低率であるが、都市平均よりは著しく高率。胃及び十二指腸潰瘍は全国と同率。腎臓炎も同様、先天性畸形は全国の半数。先天性弱質は都市平均と同率。老衰男に多く全国及び都市平均と同率。自殺及び不慮の傷害は全国平均よりもやや多く。不明の診断は高率。これは心臓麻痺の診断が多いのに因る。

(XI) 主な死因となる疾病

本市に於てその死亡数が最も多い疾病から列記すれば、1) 腦溢血 2) 肺炎 3) 腎臓炎 4) 呼吸器の結核 5) 2才以下の下痢及び腸炎 6) 癌 7) 老衰 8) 2才以上の下痢及び腸炎 9) 不明の診断 10) 先天性弱質 11) 呼吸器以外の結核 12) 慢性心内膜炎 13) 腦膜炎 14) 氣管支炎 15) 自殺 16) 肋膜炎 17) その他の消化器病 18) 不慮の傷害 19) 胃及十二指腸潰瘍 20) その他の呼吸器病 21) 百日咳 22) その他の神経病 23) チフテリア 24) その他の傳染病 25) 腸チフス等々である。

(XII) 體性及び年齢階級別に見た主な死因

まづ4才以下は男女共その $\frac{1}{3}$ は下痢及び腸炎 $\frac{1}{5}$ は先天性弱質で死亡し、ついで肺炎・腦膜炎が多い。5才-9才では男女ともその $\frac{1}{5}$ は下痢及び腸炎で、腦膜炎・肺炎・チフテリアがこれにつぐ。10才-14才では呼吸器以外の結核が最も多く、ついで呼吸器の結核であり、ともに女に多い。ついで腦膜炎・下痢及び腸炎、15才-19才では男女ともその $\frac{1}{3}$ は呼吸器の結核で死亡する。呼吸器以外の結核・腦膜炎・肋膜炎これにつぐ。20才-24才・25才-29才及び30才-34才でも同様で結核が最も多く $\frac{1}{3}$ 乃至 $\frac{1}{5}$ を占め、ついで腦膜炎・肋膜炎が多い。35才-39才では男女とも、なほ呼吸器の結核が一番多いが、やや減じ $\frac{1}{5}$ となる。第二位には腎臓炎ついで肺炎多く、その他の結核は第四位に落ちる。40才-44才となるも、なほ呼吸器病結核が最も多いが、男の方が女より著しく多くなる(男は $\frac{1}{5}$ 女は $\frac{1}{12}$ ついで腦膜炎・腎臓炎・癌である45才-49才となれば腦溢血が第一位となり、その約 $\frac{1}{5}$ に當る。これについで癌(共に女の方が多し)、腎臓炎及びその他の心臓病である。結核は第五

位に轉落する。50才-54才及び55才-59才に於ては男女ともその $\frac{1}{5}$ 以上は腦溢血である。ついで癌・腎臟炎・肺炎の順序である。60才-64才となれば男女ともその $\frac{1}{3}$ は腦溢血で死亡し、ついで腎臟炎・癌である。65才-69才に於ても同様であるが第四位には老衰が初めて登場して來る。70才-74才ともなれば腦溢血($\frac{1}{5}$ 及び $\frac{1}{3}$)についで老衰($\frac{1}{6}$)腎臟炎・癌の順序となる。75才-79才となれば老衰が第一位となり、 $\frac{1}{3}$ - $\frac{1}{5}$ はこのために死亡する、殊に女に多い。ついで腦溢血($\frac{1}{5}$)腎臟炎・癌。80才以上ではその約半數は老衰で死亡し腦溢血・下痢及び腸炎・腎臟炎の順位である。

(受附: 昭和17年4月16日)